

2019年 11月 10日（日） 13:30-17:00

第126回〈ケア〉を考える会 於:京都市山科区・山添宅

# 死の哲学を**考**える



日高 悠登

龍谷大学世界仏教文化研究センター

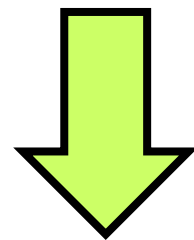
## 対話の目的

- ◆ 死と生について、参加者の皆さんと共に多角的に哲学してゆく。

## はじめに

- ◆ 人間の未知への探求心は、科学技術の発展に寄与し、科学技術力の向上は文明社会を支えてきた。医療技術の発展も、その一つであり、体外受精から再生医療に至るまで、生老病死の多くは技術的に関与可能となった。
- ◆ 関与可能になったことで、生に対する一つの“希望”のようにも捉えられたが、それでも、死の課題は残されたままである。この課題は、人間自らが創り上げた科学技術に押される形で、より一層困難な問いとして立ちはだかる。

- ◆ イェール大学教授シェリー・ケーガンは原題“*Death*”（『「死」とは何か』）において、様々な問いから死に迫る。
- ◆ 死が、何か特殊なものと誤解されがちな今日において、ケーガンによる議論の意義は大きい。



では、あらためて...

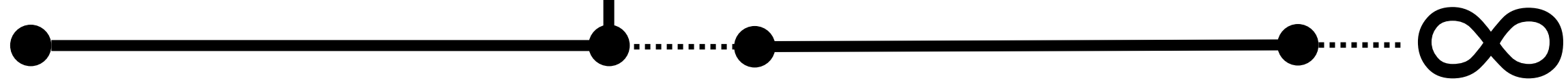
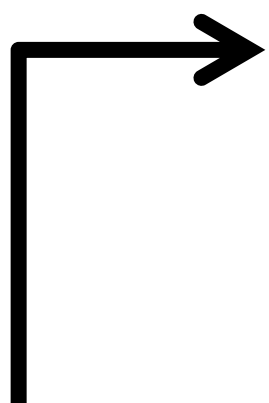
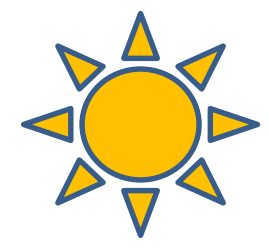
“死” とは何か？

- ◆ 死の最も具体的な現象は、三徴候死として判断される身体活動の完全停止である。
- ◆ 死は、身体に起きた現象として捉えられながらも、哲学・倫理学・宗教等においては、死の受容、死後の存在を模索し続けてきた。

レオナルド・ダ・ヴィンチ著；杉浦明平訳  
『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記（上）』岩波書店1958、p. 71

わたしは生きることを学ぶつもりであったのに、  
死ぬことを学ぶのであろうか。

生から死の過程のイメージ



生

(老

病)

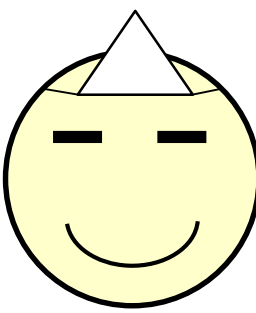
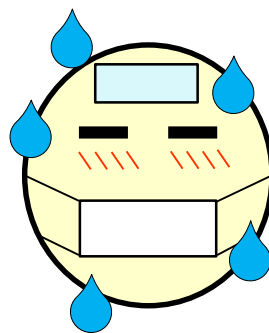
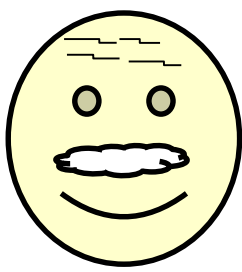
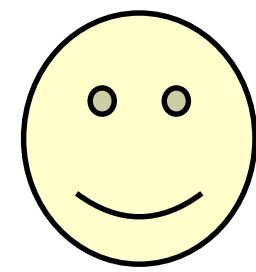
死

生

(老

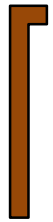
病)

死

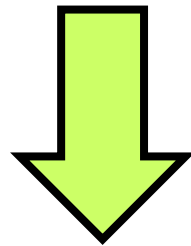


輪廻転生

無になる、消える etc.



「池袋暴走事故」 ・ 「京都アニメーション放火事件」



マス・メディアを介した死

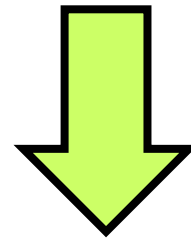
悲惨な現場、被害者の写真、遺族の声、献花台に訪れる人々の様子と共に、死は報じられてきた。



- ◆ 報道された死は、家族・友人という親しい者たちを除いて、自分と関わりが無い、他者の出来事という認識からもたらされる“悲しみ”であり〈仮想的実感〉としての死である。
- ◆ 「〈Virtual Danse Macabre〉（仮想的な死の舞踏）  
と言うべき、複雑な事情を含んだ死の情報群と密着しながら生きている」（日高2018:30）

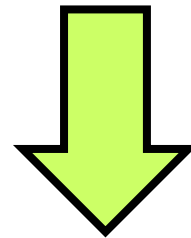
クリッチリー，サイモン著；杉本隆久；國領佳樹訳  
『哲学者たちの死に方』河出書房新社2009、p. 345

死は最大のタブーである。われわれはそれをまともに見ることができない。皮膚の向こう側にある骸骨を見るのが恐ろしいのだ。〔中略〕死の恐怖とは、弱さの恐れである。それは年老いて、老人ホームに閉じこめられ、それに戸惑う友人や、遠くに住んでいる多忙な家族に顧みられなくなることへの恐怖なのである。



どのように死ぬべきか、死への態度が究極的な問題とされることが多い。だが、死の恐怖への向き合い方は、実際に困難を極める。

現世は、生者たちは、独力で存立しているのではない。無量無数の死者たちこそ、事物や行為を名づけ、意味分節体制をつくり出し、民族の歴史や民俗を基礎づけ、法律や宗教の起源を教えているのだ。〔中略〕死者たちは、生者たちという胎児を活かしめている胎盤にほかならない。



私たちは、大多数の死者たちが創り上げた世界に生きている。それゆえ、死者を抜きにした世界を語ることなど出来ない。死者への敬意を払う時、それは特定の人々への行為であり、同時に、死者全体への行為にもなる。

- ◆なぜ、これまで私たち人間は、動物を含めた死にゆく存在を思い、悲しんできたのか。
- ◆それは、互いに生きながらに交流できず、思い出としてしか蘇らせなくなる〈喪失的存在〉となったからである。
- ◆死は、生前の様子を知る契機ともなることから、死が持つ力の大きさは計り知れない。

# アルフォンソ・リンギス (1933-)



You Tubeより

リトアニア系移民の農民の子として、アメリカに出生  
ルーヴァン大学にて哲学博士号を取得  
元ペンシルベニア州立大学教授、同大学名誉教授

*“The Community of those who have nothing  
in common”* (1994)

(『何も共有していない者たちの共同体』)

リングスは、病院で死にゆく者に付き添う者の必要性を考え続けた中から共同体を問い直し、どのような場所であれ、死にゆく者を見捨てるような社会は成り立たないと考え、人種・言語・宗教・経済と共有関係にある者に対し、何も共有していない人々の死が、私たちと関係していることを唱えた。 (pp. IX-X.)

私たちの世代は、つまるところ、カンボジア人、ソマリア人、そして、私たちの都市の路上にいる社会的に追放された人々を見捨てることにより、私たちは裁かれていることをぼんやりと感じているのだ。

(ibid., p. X.)

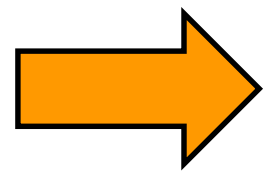
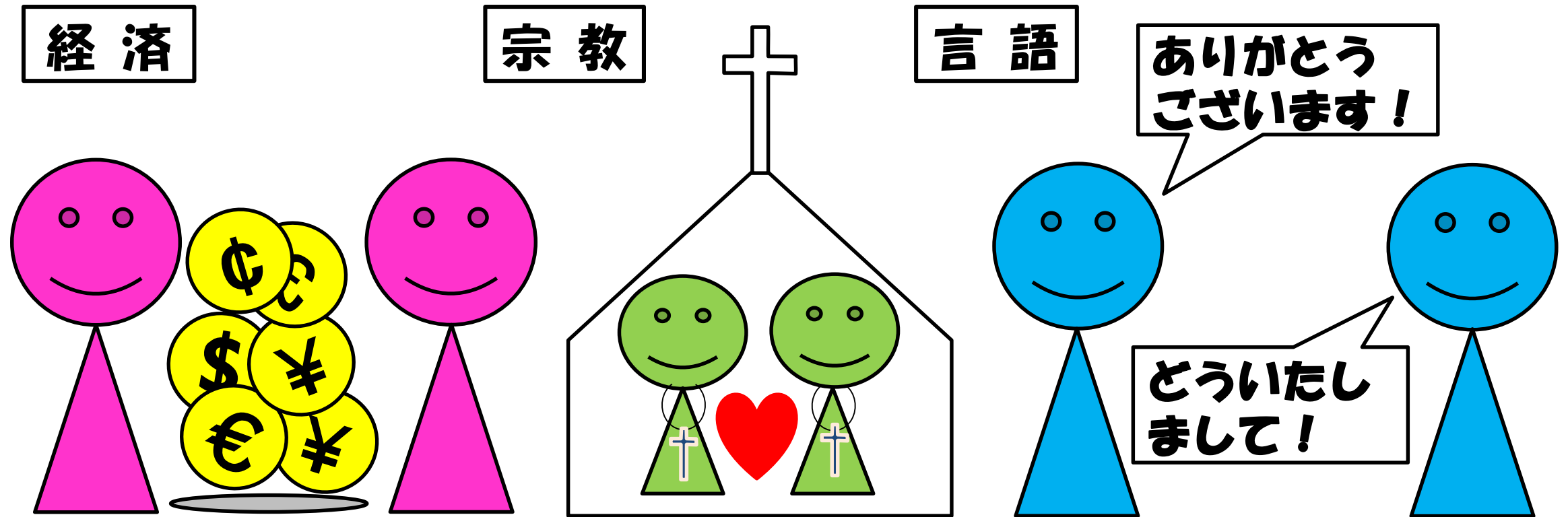
リンギスは、次の二つの造語を用いて  
共同体を捉え直す。

合理的共同体

もう一つの共同体



# 合理的共同体のイメージ

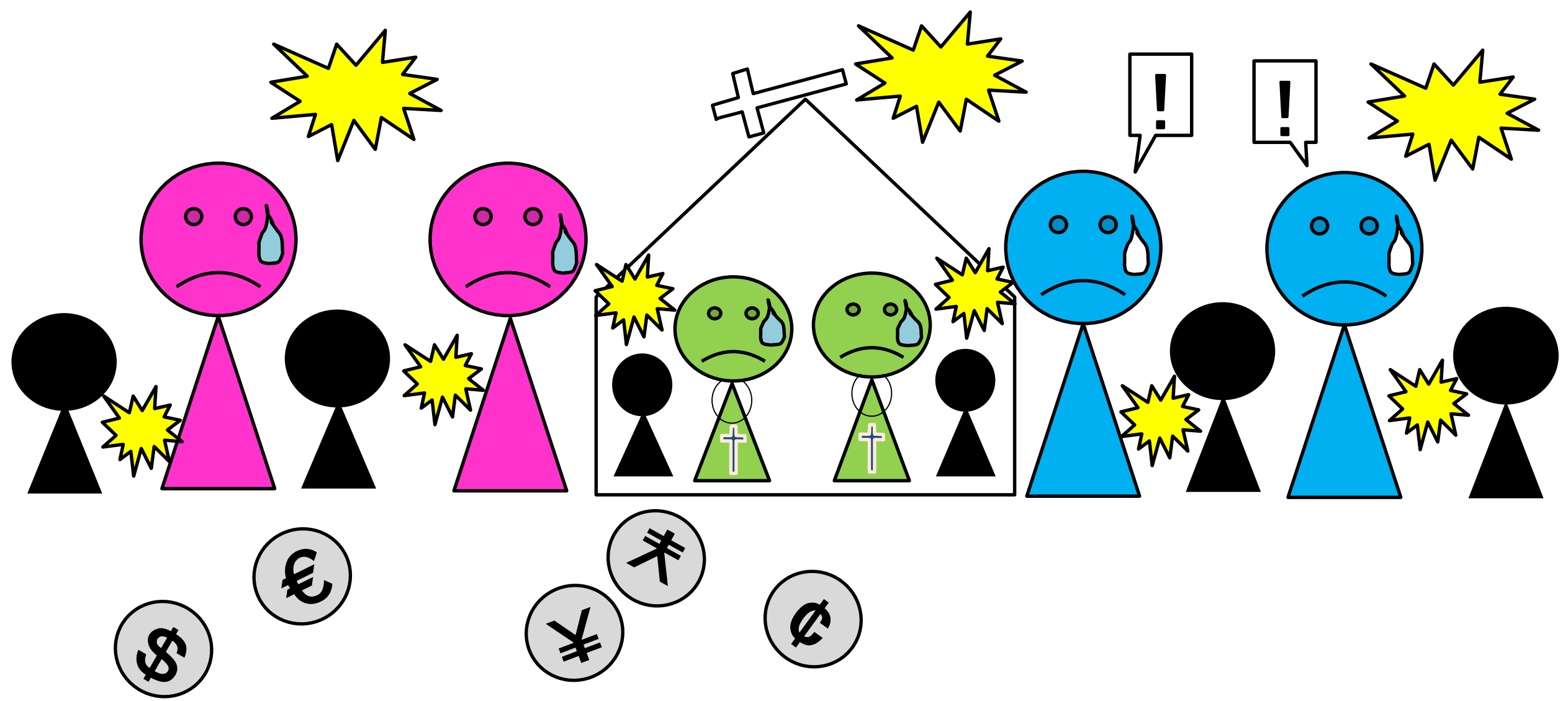


合理的共同体には、何かを共有しているという前提がある。

もう一つの共同体は、単に合理的共同体に吸収されるだけではない。それは繰り返し、合理的共同体の生き写しとして、または、その影として合理的共同体を悩ませる。

(ibid., p. 10)

# もう一つの共同体のイメージ



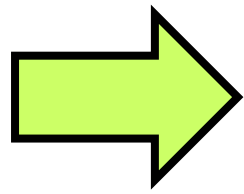
何かを言わなければならないという、言葉の恐ろしい重みにくじかれて、死にゆく者のベッドサイドに赴かない者たちがいる。彼らには、無言のまま、すでに他者と共に死と沈黙の領域へ連れ去られたかのように思っている。だが、もしあなたが、どうにかして行く勇気を出したならば、そこにいて、何かを言わなければならないことを確信する。絶対に必要なのは、あなたがそこにいて話すことである。あなたが言うことは、結局のところ、ほとんど問題ではない。あなたは何かを言ってしまおう——「きっと大丈夫だよ、母さん」と——あなたは、こんなことを言うことは愚かなことであり、彼女の知性に対する侮辱でさえあることも知っている。

(続く)

(続き)

彼女は、自分が死に向かっていることを知っており、あなたよりも勇敢だからである。結局、何を言うかは大して重要なことではないのだ。何を成すべきであったか。それは、あなたが何かを言う、ということだけだったのである。あなたの手と声が、彼女が漂っているどことも知れぬ場所に付き添って伸び、その声の温もりと声色が、彼女の息が途切れる時に、彼女の場所へ届くこと。そして、あなたの目の光が、見るものが何も無い所に向ける彼女の目と出会うことである。〔中略〕合理的共同体では、他の状況が正常とされている。言われているということが本質的であり、言うということが非本質的であり、必要なのは誰が言うにしても、その人が、このことを言うということである。

(ibid., pp. 108-109.)



あなたそっくりのアンドロイドでも、  
あなたの代理人でも、  
他の誰でもなく、  
あなた自身でなければ意味が無い。

社会形態には、家族性という実際の認識を越えた何か別のものがある。つまり、所有したり、生み出すことを何も共有していない者たちの、彼らの死ぬべき運命において個々に欠けている親交である。それは見識、命令、資産の交換ではなく、異なる個人同士の生の交換において現実のものとなる。人は他者の為に関いている死の場所に自身を完全に置く時、その他者の同胞となる。

(ibid., p. 157)

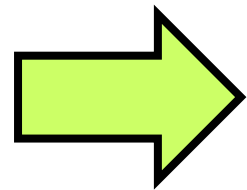
家族性を越えた、この死の共同体を見付ける為には、私たちは家族性から極限にまで離れた状況において、自身を見つけ出すか、自身の想像力により自らを置かなければならない。

例えば、

自国が戦争をしている国の中に、  
自分が信仰できない、または自分を排除する宗教で  
結ばれている外国人たちの間に、  
自分と生産的・商的取引が一切無い、  
自分に何の借りも無い、  
自分の言語を一語も理解してくれない、  
自分と年齢がかけ離れた人（同年齢の集団でさえも一つの  
拘束である）  
と、共にいるという状況に、自身を見つけ出すのである。

(ibid., pp. 157-158.)



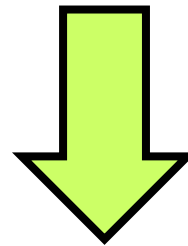


リングスは、他者との出会いを大切に  
することで、新たな共同体の可能性を  
模索してきた。

*“Dangerous emotions”* (2000), p. 185.

死にゆく者との付き合いを許されるということとは、私たち自身の完全性、私たちの健康、社会、そして勇気を危険に晒すことである。死にゆく者に同行する機会を与えられているということは、最も情熱的で、最も贅沢な贈り物が与えられていることである。

死は既知であり、未知である



が、ゆえに…

自らの死を受け入れる為には、他者との関係からも考え、死の意味を問い直していかなければならない。

Q. 死について、どう考えていますか？  
または、どう考えていきますか？

\* テーマ予告 ・ ・ ・ 看取りにおける宗教者たち

## 参考文献

- ◆ クリッチリー, サイモン著; 杉本隆久; 國領佳樹訳『哲学者たちの死に方』河出書房新社2009
- ◆ ケーガン, シェリー著; 柴田裕之訳『完全翻訳版 「死」とは何か: イェール大学で23年連続の人気講義』文響社2019
- ◆ ダ・ヴィンチ, レオナルド著; 杉浦明平訳『レオナルド・ダ・ヴィンチの手記(上)』岩波書店1958
- ◆ 日高悠登「看取りとは何か」『メタフュシカ』(49)、2018. 12、pp. 29-41
- ◆ Lingis, Alphonso., *Dangerous emotions*, Berkley: University of California Press, 2000.(邦訳版 アルフォンソ・リングス著; 中村裕子訳『汝の敵を愛せ』2004)
- ◆ Lingis, Alphonso., *The community of those who have nothing in common: studies in continental thought*, Bloomington: Indiana University Press, 1994.(邦訳版 アルフォンソ・リングス著; 野谷啓二訳『何も共有していない者たちの共同体』洛北出版2006)
- ◆ アルフォンソ・リングス著; 小林徹訳『変形する身体』水声社2016
- ◆ リングスの経歴は本人の著作(2006・2016)から、画像はYou Tubeより取得。  
“Alphonso Lingis on Reading and Writing”  
<https://www.youtube.com/watch?v=PfdTXrFKUuE>
- ◆ 渡辺哲夫『死と狂気』ちくま学芸文庫2002